

4 2 「阿弥陀堂だより」

南木佳士（なぎ けいし）の小説である。

芥川賞作家なので、文学好きの人はその名を知っていると思う。

私は、あるきっかけで知るようになった。妻が作家の姉と知り合いで、彼女がガンで入院することになったある時、自分の弟が作家であることを知らされ、読んでみてはと本を貸してくれたのだ。

南木佳士の小説は、自分の経歴を題材にしたものが多く、中でも生と死を主題にしたものに真価があるように思う。

まず、彼の略歴を書いておく。

昭和26（1951）年、群馬県に生れる。秋田大学医学部卒業。現在、長野県南佐久郡臼田町に住み、佐久総合病院に勤務、内科医長。56年、難民医療日本チームに加わり、タイ・カンボジア国境に赴く。同地で「破水」の第53回文学界新人賞受賞を知る。平成元年、「ダイヤモンドダスト」で第100回芥川賞受賞。多忙な医療活動の傍ら、着実な創作活動を続けている。他の著作に、短編集「エチオピアからの手紙」「落葉小僧」、長編小説「医学生」「山中静夫氏の尊厳死」、エッセイ集「ふいに吹く風」「医者という仕事」などがある。

彼は群馬の寒村に生まれ、3歳のとき母を肺結核で亡くした。となり村から婿に入っていた父は、零細な農業に飽き、彼が小学3年の時ふいに家を出ていなくなってしまった。

独りっ子の彼は祖母の手で育てられた。家の生計はほとんど自給自足で成立していた。彼の小学時代の思い出は、狭い田と急斜面の畑と奥深い山での厳しい労働が核になっている。生活は、生きるためにしがみつかねばならない零細な農業の一人前の担い手として、肉体労働に明け暮れる日々であった。

3年間連絡のなかった父からある日手紙が来た。東京郊外で鉄工所に勤め、いづらか落ち着いたので、中学からは東京に出てこないか、という内容だった。

父に会いたいとも、ましてや共に暮らしたいとは思いつかなかったが、「東京」には憧れがあった。結局彼は東京に出るが、父は新しく母となるべき人と入籍して共に暮らしていた。

高校卒業までそこで辛い生活を送る。

彼は一日も早くその家を出て、村で独り暮らしを老いた祖母を呼び寄せたいと思っていた。

そして、アルバイトをしながら奨学金をもらい、大学を卒業してきちんとした職に就いて金をため、家を建てて祖母を呼びたいと考えるようになる。

彼は、作家への憧れがあるが、作家ではその実現は難しいので医者になる決心をする。

秋田大学医学部を卒業し、医師として仕事をする傍ら短編を書き始める。多くの小説の読者が一度は試みる作家への変身を、彼も夢見たのである。

『阿弥陀堂だより』は、作家を目指す「私」と医者妻、声の出ない少女小百合、そして阿弥陀堂を守る老女「おうめ婆さん」との交流を描いた物語である。

妻は大学病院で先端医療に携わっていたが、心の病（パニック障害）に罹ってしまう。

底の見えない孤独感を覚え、冷えた風が体を吹き抜けるような、そして実際に激しい呼吸困難を伴う寂

寥感に襲われる。

健康人の論理だけで物事を決める医師たちのデリカシーのなさを軽蔑し、職場での人間不信が極に達したためである。これは南木佳士自身、医師として患者の死と真剣に向かい合うことに疲れ、いつの間にか患者の死に不感症になってしまった周りの医師に対し人間不信に陥った自分を写し変えたものだ。

夫婦は、夫の生まれ故郷である谷中村に移り住む。妻は村の診療所で、心の治療をしながら緩やかに働き始める。

二人は村人への挨拶回りで「おうめ婆さん」と出会う。

谷中村の7つの集落にはそれぞれに阿弥陀堂があり堂守がいる。いずれの集落でも堂守は身寄りのない老婆の役目である。集落全体の仏壇である阿弥陀堂に住んで、村人の総代として毎日花や供物をあげ堂の掃除をする。その代価として村人は米や味噌をとどけてやる。いつの時代から始まったのか分からないが、これは生活保護によく似た村の福祉制度なのである。

おうめ婆さんの阿弥陀堂は、瓦もすっかり色あせいたるところが欠けていた。破れ障子を開けると6畳のささくれだった畳の部屋があり、正面の壁の棚に荒く彫られた阿弥陀仏の木像が坐っている。

村人たちから阿弥陀さんと呼ばれる黒く煤けた仏像は、円空仏の趣がある高さ50センチほどの座像で、幅広の顔はふくよかな微笑をたたえていた。

谷中村で暮らし始めたある日、私は『谷中村広報』に出会う。内容の乏しい広報の中で、おうめ婆さんのインタビューらしい記事だけが光っていた。

この記事は、声の出ない少女小百合ちゃんの書いたもので、「阿弥陀堂だより」は彼女がそのコラムに付けた名前だった。おうめ婆さんは小百合ちゃんに話して聞かせるのが楽しくてたまらないらしい。

私は、おうめ婆さんのところに通ううちに小百合ちゃんに出会う。そして「阿弥陀堂だより」は彼女が書いたものだということを知る。

妻は、村の診療所でのんびりと老人たち相手に仕事をしながら、釣りをしたり、薪で風呂をわかしたり、森をわたる風や川の水音を子守唄にして眠ったりと、ゆったりとした自然の時間に身を任せているうちに徐々に回復していく。

そしてついには、喉の肉腫で声が出なくなっている小百合ちゃんを、困難な手術の末救うことで心の傷を克服する。

ここがこの物語のクライマックスなのだが、私がこの小文で書きたかったのは、そのことではない。

おうめ婆さんの何げないけれど重みのある言葉を、是非味わって欲しいと思ったのである。

以下にその言葉を記す。

【阿弥陀堂だより】

目先のことにとらわれるなど世間では言われていますが、春になればナス、インゲン、キュウリなど、次から次へと苗を植え、水をやり、そういうふうに目先のことばかり考えていたら知らぬ間に96歳になっていました。目先しか見えなかったのも、よそ見をして心配事を増やさなかったのがよかったのでしょうか。それが長寿のひけつかも知れません。

【阿弥陀堂だより】

畑にはなんでも植えてあります。ナス、キュウリ、トマト、カボチャ、スイカ、：・…。そのとき体が欲しがるものを好きなように食べてきました。質素なものばかり食べていたのが長寿につながったのだとしたら、それはお金がなかったからできたのです。貧乏はありがたいことです。

【阿弥陀堂だより】

96年の人生の中では体の具合の悪いときもありました。そんなときはなるようにしかならないと考えていましたので、気を病んだりはしませんでした。なるようになる。なるようにしかならない。そう思っていればなるようになります。気を病むとほんとの病気になってしまいます。

【阿弥陀堂だより】

お盆になると亡くなった人たちが阿弥陀堂にたくさんやってきます。迎え火を焚いてお迎えし、眠くなるまで話をします。話しているうちに、自分がこの世の者なのか、あの世の者なのか分からなくなります。もう少し若かった頃はこんなことはなかったのです。怖くはありません。夢のようで、このまま醒めなければいいと思ったりします。

【阿弥陀堂だより】

阿弥陀堂に入ってからもう40年近くなります。みなさまのおかげで今日まで生かしてもらっています。阿弥陀堂にはテレビもラジオも新聞もありませんが、たまに登ってくる人たちから村の話は聞いています。それで十分です。耳に余ることを聞いても余計な心配が増えるだけですから、器に合った分の、それもなるたけいい話を聞いていきたいのです。

【阿弥陀堂だより】

食って寝て耕して、それ以外のときは念仏を唱えています。念仏を唱えれば大往生ができるからではなく、唱えずにはいられないから唱えるのです。もっと若かった頃はこれも役目と割り切って唱えていたのですが、最近では念仏を唱えない日は考えられなくなりました。子供の頃に聞いた子守歌のように、念仏が体の中にすっぽり入ってきます。

【阿弥陀堂だより】

阿弥陀堂の野沢菜漬はうまいので漬け方を教えてくれと登ってくる人がいます。教えてくれといわれども、昔からの漬け方で、塩もいがかげんに入れていきますから、教えようがありません。食べてみたい野沢菜漬の味を体が知っていて、その年の体の調子で塩のかげんを変えているのではないかと思います。万事このようにいがかげんなのであります。

【阿弥陀堂だより】

雪が降ると山と里の境がなくなり、どこも白一色になります。山の奥にある御先祖様たちの住むあの世と、里のこの世の境がなくなって、どちらがどちらだか分からなくなるのが冬です。春、夏、秋、冬。

はっきりしていた山と里との境が少しずつ消えてゆき、一年がめぐります。人の一生とおなじなのだ、この歳にしてしみじみ気がつきました。

「阿弥陀堂だより」は小百合ちゃんの言葉で書かれているが、以下は生のおうめ婆さんの言葉である。

「96だか7だか、わしにもよく分からねえでありますよ。数えで98にはなってると思うであります。90を過ぎてっからはめんどろで歳を数えることもなくなったであります。人が言ってくれる歳がわしの歳だと思ふことにしているであります」

「わしゃあこの歳まで生きて来ると、いい話だけを聞きてえであります。たいていのせつねえ話は聞き飽きたもんでありますからなあ」おうめ婆さんは文章を書く二人に小説のあるべき姿に関する説教を垂れた。

「世の中にいい話っていうのは少ないから、ほんとならしく創るのって大変なんですよ。だから、小説には悲しい、やるせない話が多くなってしまふんですよ」愉快な小説は悲劇よりも書きづらいのを知っている私は自戒の意を込めて答えた。

「金出して本買って、せつねえ話を読まされるじゃあたまらねえでありますよや。うれしくなりたくって金を払うじゃあありますまいか」おうめ婆さんが同意を求めて下から見上げてきたので、小百合ちゃんは何度もうなずきながら白い歯を見せた。

尋常小学校しか出ていないので漢字もよく読めないおうめ婆さんだったが、話題に対する反応のよさには老人特有の鈍さが少しも感じられない。長く生きてきた老人の言うことだから仕方なく肯定するのではなく、道理に合っているから納得せざるを得ないのである。各集落に堂守の老婆はいるはずだが、小百合ちゃんが六川集落のおうめ婆さんに目をつけたのは正解であった。

「『阿弥陀堂だより』っていうタイトルを考えたときは、各集落の阿弥陀堂守から話を聞くつもりだったんだけど、やっぱりおうめ婆さんに並ぶ人はいなかったってことかなあ」小百合ちゃんと対話するときは、こちらから相手の考えていそうなことを推察してやる必要があった。さもないと、彼女はノートにびっしりと語りたい内容を書きつらねなければならなくなってしまう。

小百合ちゃんは一行で返事をくれた。

そのとおりです。

よく分かりましたね、と言いたげに小百合ちゃんは目を丸くした。

「わしゃあ自慢じゃねえであります、ここに入ってから4、50年になります、六川から出たことはねえでありますから、よその阿弥陀堂にどなたさんがいるだか知らねえでありますよ」

「そうでありますなあ、こうして毎日南無阿弥陀仏を唱えることでありましような。南無阿弥陀仏さえ唱えていりやあ極楽浄土へ行けるだと子供の頃にお祖母さんから教わりましたがな、わしゃあ極楽浄土なんぞなくてもいいと思っているでありますよ。南無阿弥陀仏を唱えりやあ、木だの草だの風だのになっちまった気がして、そういうもんとおなじに生かされてるだと感じて、落ち着くでありますよ。だから死ぬのも安心で、ちっともおっかなくねえでありますよ」

おうめ婆さんは茶をすすりつつ、淡々と語った。

私は話の含蓄はもちろん、これだけ分かりやすく、端的に考えを伝え得る96歳の老婆の頭脳明晰さに感心させられた。小百合ちゃんが聞きたかったのもおそらく、この打てば響くさりげない解答だったのであろう。

阿弥陀堂の目張りだらけの障子を背に、妊娠7ヶ月になる妻のせり出した腹の横に、桑の木の杖をつき90度に腰を曲げたおうめ婆さんの頬があり、左に小百合ちゃんがいる。3人の女たちは実にいい顔で笑っていた。

96歳、43歳、24歳。老齡、中年、娘盛り。それぞれの年代の女たちはしぶとさすら感じさせるあけっぴろげな笑顔でカメラを見つめている。

「私は」理屈はあとにして、手足をフルに使って人間らしく生きる基本の食糧を自給してみる。大地に足を着けた生活の中から、ほんとに頼りになる言葉だけを選び出して小説を書きたいと思う。

(2013.02.03)